

埼玉第九合唱団第28回演奏会

山に祈る

清水脩追悼公演

演奏会によせて

埼玉第九合唱団顧問 田尻明規

埼玉第九合唱団のみなさん、第28回演奏会おめでとうございます。

さて、みなさんは合唱とは何か、歌とは何か、また何の為に歌うのか、お考えになったことがありますか。「なにもそんなに面倒なことを考えなくても…ただうたいたいのです。」と言われる方も少なくないでしょう。そう、うたいたいからうたうのです。でも、そのうたいたいということが単に声を出せば良いということにおわってしまうのでは、ちょっと淋しいですね。人間はうたわなくても生きていけるでしょう。それだけに、うたうということに何か大きな意味を見つけないと私はいつも思っています。うたには、声を出すということのほかに、その人の心のありようを表現するという重大な使命もあります。したがって、私達は、美しいものに感動する心と、それを素直に表現する健康で柔軟な心と体を持たなければならないでしょう。とかく声のよしあしや、音程などのテクニックにおわれ、またおぼれ易いものですが、それらを超越したところに真の音楽はあるのですね。

どうか、満堂の人々の心をゆりうごかす、ほんとうの「うた」をうたって下さるようお願いいたします。 6月 ある梅雨の晴れ間に

正指揮者 宮寺 勇

初夏の夕べのひとつときを、本日の演奏会においていただき本当にありがとうございました。この半年間の勉強の成果を、皆様にお聞きいただけますことを心から感謝申し上げます。

今回の第九合唱団は、昨年亡くなられました清水脩先生を追悼するために合唱組曲「山に祈る」を中心におおくりすることになりました。清水脩先生は現代の作曲家として多くの合唱曲を残され、今回演奏する「山に祈る」もその代表作の一つに数えられております。この曲は山で息子を失った母親を歌ったものとして、その嘆きの中に秘められた母親の深い愛情をどのように表現するかがポイントになっております。

半年間の練習でこの点がどの程度完成されていくか心配致しましたが、団員達の限りない合唱への熱意によって、本日は皆様の期待に沿える演奏をお届けできるものと思っております。どうか本日のコンサートが皆様のよき思い出となり、一人でも多くの音楽ファンが生まれますようお祈りいたします。

第28回定期演奏会の開催に当って

埼玉第九合唱団団長 米本 敬一

本日はお忙しい中、埼玉第九合唱団の定期演奏会においていただきまことにありがとうございます。私達埼玉第九合唱団は、今年で創立14年目を迎え本日第28回目の演奏会を開催することとなりました。これも偏にご来場下さいました皆様方の応援の賜物と、団員一同心から感謝いたしております。

さて今回の演奏会は、先頃逝去されました作曲家清水脩氏を悼み、氏の作られた作品の中から、合唱組曲として名高い「山に祈る」を中心に演奏曲目を編成いたしました。清水脩氏は「修禅寺物語」などのオペラの作品とともに今回演奏いたします「月光とピエロ」など、数多くの合唱曲を作っておられます。私達合唱をするものにとって、合唱芸術の分野に大きな足跡を残された氏を追悼することは、氏の音楽観を振り返り、合唱の原点を問い直すことには至らない点が多くあり、本日の演奏会でどの程度清水脩氏の作品の心を皆様にお伝えできるか不安ですが、団員一人一人が誰にも負けないと自負する合唱への情熱で少しでも補えればと思っております。

本日は日頃の練習の成果を、皆様の前で精一杯発揮したいと考えておりますので、最後までごゆっくりお楽しみ下さいますようお願い申し上げます。

1987年7月11日(土)
大宮市民会館 大ホール

埼玉県文化振興基金助成事業

目 録 解 説

1. 「Zum Abendsegen」 (メンデルスゾーン)
2. 混声合唱組曲「海鳥の詩」 (詩: 更科源蔵 曲: 広瀬量平)

冷たく寒い、厳格な北国の中に生きる生命の、けなげにも逞しい姿。それはとりもなおさず、その地に暮らす人々の姿でもある。

「海鳥の詩」は、1977年NHK委嘱作品として、更科源蔵の詩二篇に、新たに書き下した一篇を加え、三楽章の組曲として作られた。その後さらに終曲がつけ加えられ、全四曲の組曲として完成された。本作品は1977年芸術祭優秀賞を受賞している。

1. オロロン鳥: オロロン鳥とはウミガラスの別名。断崖に立ち、オロロンオロロンと鳴く。まるで呼びかけるように。
2. エトピリカ: 赤い嘴と黄色い冠毛を持つ、色彩の美しい鳥。ただひたむきに霧の中を飛ぶ姿は、求道者のようである。
3. 海 鶉: 沈黙の鳥は岩壁の上でじっとうづくまる。風の音、潮の音を聞きながら。
4. 北の海鳥: 潮は渦巻き風雨の荒れ狂う北国の自然。その中で懸命に生きる海鳥たちへの讃歌。それは全ての生き物への讃歌でもある。

3. ピアノソナタ ヘ短調 作品57 「熱情」 (ベートーベン)

ベートーベンが作曲した32曲のピアノソナタの中で最も有名な曲。ベートーベンの中期の傑作といわれる。「熱情」という副題は、後世付けられたものであるが、激情の作曲家ベートーベンの代表作にふさわしいタイトルといえよう。

- 第1楽章 「アレグロ・アッサイ」ソナタ形式の緊迫感ただよう楽章。
- 第2楽章 「アンダンテ・コン・モート」おだやかな変奏曲。
- 第3楽章 「アレグロ・マ・ノン・トロppo」 「熱情」の名にふさわしい情熱的な楽章。終盤は怒濤のようなクライマックスを迎える。

4. 清水脩合唱曲集

「月光とピエロ」「智恵子抄」等の多くの合唱曲を作曲され、またアマチュア合唱団の育成に貢献された清水脩氏は、昨年10月逝去された。75歳であった。

氏は1911年大阪生まれ。1932年大阪外語大学仏語科卒。37年東京音楽学校専科作曲部に入学。橋本国彦、細川碧に師事。40年卒業。同年音楽コンクールに1位入選。戦後全日本合唱連盟の創設に参画し、晩年には同連盟名誉会長をつとめた。また日本オペラ協会会長でもあった。

このステージでは、氏に追悼の思いを込め、氏の作品より男声合唱組曲「月光とピエロ」より2曲、女声合唱曲2曲、合唱組曲「山に祈る」をおおくりします。

男声合唱組曲 「月光とピエロ」より (詩: 堀口大学)

氏の作品の中でももっともポピュラーな合唱曲。

女声合唱曲集より 「野葡萄」「出船」(詩: 大木惇夫)

女声の透明感あふれる小品。

合唱組曲 「山に祈る」(混声編)

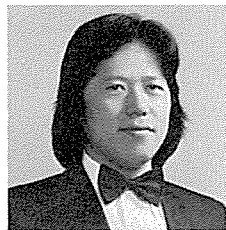
冬の日本アルプスで遭難し散った若者を偲んで作られた曲。実際の遭難をもとに清水脩自身によって脚色、構成されているドラマチックな曲である。

出 演 者 紹 介

■ 指揮 宮 寺 勇

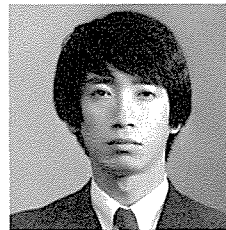
玉川大学卒業後、ウィーンに留学。ヘルムート・リリング、佐藤功太郎、牧野統、三村精一らに師事。さらに、東京芸術大学大学院において、指揮法の研鑽を積む。現在、春日部女子高等学校教諭。埼玉県合唱連盟理事。

1983年、埼玉第九合唱団正指揮者に就任し、熱意とユーモアに富んだ指導により、団員の深い信頼を得ている。フォーレ「レクイエム」をはじめオーケストラ伴奏の大合唱曲を指揮、中でも、昨年の第26回演奏会で新日本フィルを指揮したブッチェニの「ミサ・ディ・グローリア」(日本初演)は高い評価を受けている。その他にも、多くの合唱団を指導し、広くアマチュア合唱団活動の発展のため活躍している。



■ ピアノ伴奏 田 尻 桂

桐朋学園大学ピアノ科卒業。埼玉会館主催第5回埼玉県新人演奏会出演。3年前からピアノ伴奏者としてその重責を果たしている。今後が大いに期待されるピアニストであるとともに聖セシリア声楽コンソート指揮者もつとめている。現在、伊奈学園総合高等学校教諭。

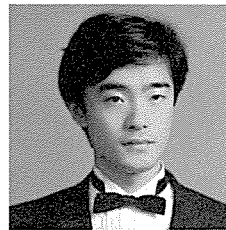


■ ピアノ独奏 浅 子 元

(技術部長・副指揮者)

東邦音楽大学音楽学部音楽学科、ピアノ専攻を首席卒業。第53回読売新人演奏会出演。第5回埼玉県新人演奏会、第103回 県民コンサート・フレッシュコンサートに出演。ソロ・伴奏等で各種コンサートに出演している。細川哲朗、名越史子に師事。東邦音楽大学附設高等学校教諭。

合唱団では指揮者を補佐するなど、技術部長として活躍している。



■ 朗読 阿 部 百合子

1957年 劇団俳優座入団。1974年 6月の「三人姉妹」から「日本繁栄学入門」「十二夜」「アントニーとクレオパトラ」「嵐の中の赤いバラ」(新人会)「門」等をへて現在に至る。「山に祈る」の朗読は3回目。



■ 演出・照明 今 村 憲一

埼玉県知事 畑 和

埼玉第九合唱団第28回演奏会の開催を心からお祝い申し上げます。貴合唱団は、第九交響曲をはじめとした合唱活動を通して、数々のすばらしい成果をあげてこられ、皆様の活躍は、県内の音楽活動の振興、向上のために大変意義深いことと思われまます。県におきましても、かねてから、地域文化の振興を県政の重要な柱の一つとして推進しているところでありますが、皆様の活動により、音楽を愛好される多くの方々の心の交流が深まり、本県の音楽文化がよりいっそう盛んになりますよう願ってやみません。今回の演奏会の御成功と、合唱団のますますの御発展を祈念いたします。

合唱 埼玉第九合唱団

ベートーベン生誕200年を契機に、1973年、当時の大宮労音(現埼玉音鑑)を中心に結成された合唱団。団員は 常時100名以上を有し、社会人・学生・主婦などさまざまな職業、10代から60代までの幅広い年齢層で構成され、歌うことの好きな人々が県内各地から集まって、週2回の練習を行なっている。

毎年、年末には、ベートーベンの「第九」を演奏し、夏には、オーケストラ伴奏による合唱音楽の大曲を中心に取り組み、この間、日本を代表する多くの指揮者、独唱者、オーケストラと共演している。年2回の演奏会だけではなく、大宮市民音楽祭への参加、各地の演奏会への賛助出演、各局テレビ出演等、意欲的に活動し、1980年には、埼玉県文化ともしび賞を受賞した。また埼玉県合唱コンクール金賞、あわせて全部門総合一位を獲得した。

合唱を楽しみ、常に心の通ったハーモニーをめざし、練習の他に 年5回の合宿・親睦旅行・バーベキュー大会等、様々な交流会を持ち、相互の親睦をはかっている。



埼玉第九合唱団 演奏記録

1973. 5. 14	埼玉第九合唱団結団式	
12. 21	ベートーベン「交響曲第九番」	外山雄三/群 響
1974. 6. 9	合唱組曲「旅」ハイドン「四季」	土肥 泰/稲田 浩
12. 14	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/東 響
1975. 6. 9	合唱組曲「山に祈る」	田尻明規/中村恵子
12. 13	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/東 響
1976. 6. 21	合唱組曲「蔵王」	田尻明規/粕谷いづみ
12. 16	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/新星日響
1977. 7. 2	オペラ「カルメン」	土肥 泰/日フィル
12. 10	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/日フィル
1978. 6. 29	合唱組曲「水のいのち」	田尻明規/大高雅子
12. 17	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/新星日響
1979. 7. 10	ショスタコーヴィッチ「森の歌」	外山雄三/新星日響
12. 13	ベートーベン「交響曲第九番」	土肥 泰/新星日響
1980. 7. 15	モーツァルト「レクイエム」	田尻明規/新星日響
12. 9	ベートーベン「交響曲第九番」	渡辺晁雄/日フィル
1981. 7. 11	合唱組曲「土の歌」他	田尻明規/東京労音響
12. 11	ベートーベン「交響曲第九番」	佐藤功太郎/新星日響
1982. 7. 17	ヴェルディ「レクイエム」	田尻明規/新星日響
12. 16	ベートーベン「交響曲第九番」	小泉和裕/日フィル
1983. 7. 22	ラフマニノフ「鐘」	田中一嘉/新星日響
12. 20	ベートーベン「交響曲第九番」	レナルド/新星日響
1984. 7. 21	フォーレ「レクイエム」	宮寺 勇/新星日響
12. 13	ベートーベン「交響曲第九番」	大町陽一郎/新星日響
1985. 7. 12	合唱組曲「筑後川」他	宮寺 勇/田尻 桂
12. 19	ベートーベン「交響曲第九番」	ワイナル/新星日響
1986. 6. 20	プッチーニ「ミサ・ディ・グローリア」	宮寺 勇/新日フィル
12. 12	ベートーベン「交響曲第九番」	レナルド/新星日響

合唱団員名簿

ソプラノ

大 嶋 文 子	芦 田 靖 子	堀 江 君 江	島 野 洋 子
中 山 明 子	島 田 靖 子	矢 野 安 恒 子	三 村 名 雪 子
植 島 玲 子	大 里 佳 子	新 井 あ や 子	泉 三 水 本 喜 代 子
原 橋 礼 子	大 宮 崎 久 子	山 口 昌 子	三 野 富 打 柳 屋 藤 佐
大 橋 由 香 子	渡 辺 久 恵 子	萩 原 圭 陽 典 裕	
北 川 玲 子	車 塚 恵 子	栗 原 間 森 子	
川 人 俊 江 幸	原 田 恵 美 子	風 宮 田 井	
道 庭 美 貴 子	尾 池 直 美 浩	宮 崎 直 美 浩	
西 川 富 貴 子	星 美 江		

アルト

大 沢 英 子	中 村 姚 丸	丸 山 惠 美 子	谷 島 あ い 子
来 丸 と し 子	西 谷 か さ ね	皆 川 美 保 子	草 谷 智 意 子
鈴 木 紀 子	吉 村 明 美 子	芳 賀 藤 啓 子	大 里 井 閑 子
井 上 紘 子	安 富 英 静 枝	内 藤 愛 子	桜 井 川 琴 枝 子
石 田 美 代 子	加 藤 島 美 純	斉 高 小 石 高 角	黒 岩 兵 美 千 世 記 公 子
宮 本 優 あ さ 子	牛 坂 井 陸 子	保 大 多 沢 三 堀	小 笠 原 田 溝 山 幕 古
金 子 綾 智 子	沢 野 弘 浩 友	久 美 子 尚	小 笠 原 田 溝 山 幕 古
大 和 新 小 吉			

テノール

坂 本 宗 男	大 熊 勝 則	生 駒 孝 堀 富 雄
南 哲 郎	松 井 俊 治	浅 子 元 三 村 隆 男
斉 藤 真 琴	大 米 本 敬 一	金 沢 利 則 一
大 野 起 一	犬 塚 大 蔵	森 泉 誠 一

バス

大 崎 裕 久	榎 本 法 夫	鎌 田 明 望 月 悦 育 紀
西 川 裕 二	本 橋 正 吉	瀨 島 祐 二 中 峰 直
青 柳 輝 和	渡 辺 清	



(祝・仏) 盛花・花環・花器

有限会社

長島生花店

大宮支店 大宮市役所通り 電話 (0486)42-6212番
 本店 宮原 電話 (0486)64-5241番
 造花部(仏・祝儀) 電話 (0486)42-6212番